

ワールドサッカーにおけるシュート地点とアシスト地点 の傾向に関する分析

Analysis about the tendency of the shot spot and The assist in the world soccer

1K10C128-3 川井 大地

主査 堀野博幸 先生

副査 石井昌幸 先生

【目的】

本研究では、ポゼッションサッカーが主流となってきた 2010 年 FIFA ワールドカップ南アフリカ大会と EURO2012 年ポーランド・ウクライナ大会の全 221 ゴールを判断材料として、世界のサッカーにおいてどのような得点パターンが多いのかを検討した。その結果から、今後の日本のストライカー育成指導のガイドラインとして役立てることを目的とした。

【方法】

1. 研究対象

FIFA ワールドカップ 2010 年南アフリカ大会と、EURO2012 年ポーランド・ウクライナ大会の全 221 ゴールを分析対象とし、シュート地点とアシスト地点に関して調査した。

2. 分析手順

上記の全 221 ゴールを DART FISH Team Pro (ダートフィッシュ・ジャパン) を用いて、シーン抽出と分析を行った。

3. 分析項目

先行研究を元に、独自に設定したアシスト地点とシュート地点について 10 項目を設定した。

【結果】

1. ポジション別

FW と MF の間に有意差はみられなかったが、FW と DF の間、また MF と DF 間で FW と MF の方が DF より有意に多かった。

2. 得点者タッチ数

得点者のタッチ数に関して 1 タッチの方が 2 タッチ以上すべてのタッチ数において有意に多かった。

3. シュート部位

シュート部位に関してイサイドとインステップに関して有意な差はみられなかった。しかし、インサイドの方がインフロント、アウトサイド、身体より有意に多かった。

4. シュート球種

グラウンダーとライナーに有意差はみられなかった。しかしグラウンダーとロビングに関して、グラウンダーの方が有意に多かった。

5. シュートに関してのファーストタッチの部位

インサイドの方がすべての部位より有意に多かった。

6. アシスト者タッチ数

1 タッチと 2 タッチの間に有意差はみられなかった。また、1 タッチとアシストの間でも有意差はみられなかった。しかし、1 タッチと 3 タッチ以上では 1 タッチの方が有意に多かった。

7. ラストパス球種

グラウンダーとロビングには有意差はみられなかった。しかしグラウンダーとほかの項目ではグラウンダーの方が有意に多かった。

8. 攻撃人数

数的不利の方が数的有利より有意に多かった。

9. 攻撃の形

クロスと裏では有意差はみられなかったが、クロスの方が裏以外の項目より有意に多かった。

10. シュート位置、アシスト位置、ファーストタッチとセカンドタッチ位置

シュート位置は、ペナルティエリア内に侵入してからシュートが重要である。アシスト位置は、ハーフラインより相手陣地からパスを出すことが重要である。ファーストタッチとセカンドタッチ位置は、相手ゴール方向を向いてタッチすることが重要である。

【考察】

グラウンダーのクロスボールからインサイドでグラウンダーのシュートをペナルティエリア内で打つことが、一番の得点パターンであることが明らかになった。ペナルティエリア内ではゴール正面からの得点が多く、キーパーのいない位置にシュートを打つことが重要である。攻撃の形として、裏へのパスも得点につながっている。

シューターは数的不利な状況においても、相手の守備組織が整う前にシュートを打つことが重要である。さらにシューターが 2 タッチ以上する際、ゴール方向にインサイドトラップすることも得点になりやすいことが明らかになった。

キーパーがはじいたボールやポストではじかれたボールからの得点パターンも多いことが明らかになった。シュートを打った球につめておくのが重要である。

またアシスト者も極力少ないタッチ数でクロスか裏へボールを配球することが得点につながると明らかになった。この際のパスは、ハーフラインより相手側陣地を出すことが重要である。